あった頃、社会復帰への第一歩としてホームレス支援のボランティア活動に参加した。そこで出会ったのは様々な背景で貧困を抱えた人々だった。ある女性ホームレスの生活保護の受給支援に関わった。軽度の知的障害を持っていた彼女は、若い頃から性産業の世界で生き、40代でホームレスとなった。多くのトラウマサバイバーがそうであるように、彼女もまた過去の辛い痛みを冗談めかして何度も私に話した。差別と困窮の痕がうかがえる彼女の過去に、心が絞られる思いで涙が止まらなかった。しかし、それでも彼女が不幸だったとは思わない。喪失や貧困をすなわち絶望と短絡的に結びつけることは、それもまた偏見であると、私は過去の実体験から学んだ。彼女は彼女なりに、幸せを追求していた。ただ、何があったら別の道がありえたのか、彼女にとっての必要な支援とはどんな支援だったのか。そこからは目をそらしてはいけないと思っている。

私はその後、ケースワーカーのサポートもあり無事に就労自立することができた。以降も機会に恵まれ、冒頭の通りに至っている。しかし、底を見て喪失を体感した経験がなければ、今の自分はないと断言できる。他者の声にただ真摯に耳を傾け、意見するでも提案するでもなく、透明な視点で自分や他者や社会を見つめる。そうして貧困当事者を生きた日々を忘れることなく、私は今日も経営者として奔走する。

（続く）

変わらなきゃ「高齢者住宅」

～安心の住まいに向けて㉓

高齢者住宅の可能性②

高齢者住宅の可能性は限りがありません。私たちも決して計算して家族関係に介入することはありません。が、結果的に良かったよね、というようなことはたくさんあります。これが高齢者住宅の見えない可能性でしょうか。

ご利用者にとって自宅で自分らしく最後まで暮らせることが一番であるのは言うまでもありませんが、認知症などでその方と同居の家族との関係がどんどん悪くなっていき、親族関係まで大きな争いになることは時々あります。そんなご家族にとって高齢者住宅は、関係改善の一つの方法なのかも知れません。今回ご紹介する内容は、もともと若い時から家族関係が破綻していて最悪だった家族が高齢者住宅に入居し、職員が介入することで40年ぶりに家族に戻れたというお話です。

前回、網走刑務所を出所した男性を田舎の高齢者住宅で受け入れた内容を紹介しました。彼は人生で初めての誕生日をホームで祝ってもらい号泣してから、少しずつ人間らしさを取り戻し、職員にもいろいろな話をしてくれるようになっていました。隣町の実家に帰りたいこと、亡くなった両親のお墓参りをしたいこと、弟と話をしたいこと、好きな女性がいたこと、東京で英語を学んでいたこと等々、職員も彼が実は聡明で学があることに驚かされていました。そんなある日のこと、背中が痛むと言われたので病院に行って診てもらうと、なんと膵臓がんの宣告を受けてしまいました。折角これから普通の生活を楽しもうと思っていた矢先ですので私たちは大きなショックを受けましたが、意外と本人は落ち着いていました。しかし実家に帰ってみたいという気持ちは募るばかりで、職員もどんどん弱っていく彼を見ながら何とかその思いに応えてあげたいという思いが強くなり、遂に電話をしてみることにしました。

隣町で弟は父親から引き継いだ事業を経営していました。当然彼のことはよく覚えていて、人間ではなく鬼だと怒鳴られ、会うつもりもないし、生死にも興味がないときっぱり面会は断られました。職員はその後も彼から聞いた話を何度も電話で伝え、その都度叱られては電話を切られるの繰り返しでした。そして死期が近づいてきたある日、弟がフラッとホームにやってきました。職員から聞いたことが信じられなくて、どうしても会ってみたくなったと言うのです。その面会は今まで見たことがない、涙涙の面会となりました。

数日後彼は亡くなりました。その後、数カ月が経ったある日、弟がホームに「本当にお世話になった」とお礼に来てくれました。少しの礼金を頂戴したので皆で何に使うかと考え、本人が好きだった桜の木を植えることにしました。その桜は今こんなに大きな花を咲かせています。

◀桜の花を見るたび、みんなで彼のことを思い出します

（北海道高齢者向け住宅事業者協会理事・本見研介）

シルバー新報　2022年8月5日号